大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

家庭学校史の一断面：昭和30年代の大阪市を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003523

家庭学校史の一断面
－思斉塾生の動態分析を中心に－

土井洋一

はじめに
1．思斉塾の誕生とその性格
1）思斉塾とは何か
2）誕生の経緯
3）塾生の日課と生活体験
2．思斉塾友の動態
1）『思斉塾友名簿』の性格と背景
2）『思斉塾友名簿』の分析
(1) 出身地の分布
(2) 出身学校の分布
(3) 退塾後の進路
おわりに

はじめに

本誌前号に掲載した「戦前における家庭学校職員集団の形成と特質」を踏まえ、今回は家庭学校内にあったユニークな青少年教育施設、思斉塾について、塾生の動態を中心に考察する。これまでの留岡幸助と家庭学校史に関する先行研究では、思斉塾の所在とその存在価値には触れるもののその実証的な研究は放置されたままであった。確かに雑誌『人道』や『留岡幸助日記』を精読して、思斉塾のある程度の輪郭をつかむことは可能であった。しかし、留岡幸助他幾人かの教職員と退塾生の思斉塾論のみを素材にして実証研究を進めるには難点がある。だから筆者もまた、基礎作業を繰り返しながら手をこまねいていた。

かつて筆者が東京家庭学校に資料の閲覧を求めた際には、同志社大学に寄贈したもの以外の資料は倉庫に収納したままで整理は到底不可能な状態にあるということであった。当時、東大経済学部におられた隅谷三喜男教授から学生たちに整理をさせたい旨の依頼があってなお駄目だったというから、あきらめるより他はなかったのである。ところが最近になって全国の研究者からの問い合わせがふえ、学校側にもなんとか需要に応える努力をして頂けるようになった。先日東京家庭学校にうかがい今井譲校長と親しくお話し合いをした折りに、資料の収納場所を見せて頂いた。なるほど四畳程度の細長く狭い部屋に、茶箱がうず高く積まれていたが、箱を開いて整理する空間がない。外は職員と児童が頻繁に通る廊下なのである。資料の大多数は、幸助が外国から取り寄せたり遊学中に購入した洋書類であるという。これらを調査・分析すれば幸助の思想形成の跡づけがより精緻になり、事業の構想の背景も判明してくる筈だと今井校長は言われた。学校に余力ができれば資料室を配備して整理を進めるご意向のようだ。その時が早まるように願っている。

ところで、その時に東京家庭学校でコピーして持ち帰った一点の資料が、今回の分析の強い味方となった。以下、文中では「旧名簿」と呼んでいる『思斉塾友名簿』（133名分）がそれである。この資料を補強すれば、ある程度の動態分析なら可能になる。筆者が悪戦苦闘して調べあげた塾生は43名に過ぎなかったから、133名という数はまずもって魅力である。筆者の調査は、最初から幸助の実子や家庭学校卒業生を除外して進められたが、塾生の中枢メンバーは、ほぼ筆者の調査網に入っていたこともこの名簿から判明した。苦労が報いられた気がしている。

なお、冒頭に挙げた拙稿の抜刷を筆者と近しい研究者、実践者、元・現北海道家庭学校職員等に送付したところ、全国から多くの貴重な情報が寄せられた。厚く御礼申し上げる。そうした情報をもとに最終チェックをした結果、沢山の誤記を修正できた。なお完璧である自信はないが、拙稿の修正版を近日中に関係者に送付するつもりである。

1.思斉塾の誕生とその性格

1）思斉塾とは何か

留岡幸助は、「家庭学校創立十四周年紀年会」（1912－大正元年）の講演で次のように述べている。「本校の事業は財団法人の定款に示すが如く、（い）少年感化事業、（ろ）慈善事業師範部、（は）雑誌『人道』の発刊の三種類であり」、これらを本業とすれば「学生の養成」は副業である。「本校には従来遊撃隊と称して、本校の生徒でもなく、又職員でもなく、一家の事情、其他の関係から、特に父兄及び本人の志望により、本校に寄宿した苦学生があ」る、[1] と。この後段は、そのまま思斉塾生の定義と解することができる（以下、塾・塾生・塾長等と略す）。

副業としての塾運営はもともと自然発生的なもので、確固たる計画に基づいて生まれたものではなかったが、その設立動機は早くから幸助の胸中を去来し、暖められてきたようである。塾長経験者で、塾生を代表する一人である藤田倶次郎は、校長に続いてその経緯に詳しく触れている[2]。以下、箇条書でその要旨を紹介しておく。

(1) 遊撃隊の起源は家庭学校の創設と殆ど同時期である。

(2) 14年経った今、「遊撃隊」という呼称を変更しようということになり、隊員が協議を重ね校長の許可を得て「思斉塾」と改称した。

(3) 改称理由は以下の二点である。①家庭学校、即ち「家庭」のなかに「遊撃隊」では不調和である、②改称してますます組織を強固にし向上発展させたい。

(4) 入塾理由は、経済上の理由と修養上の理由とがある。もちろん、十分な学資援助ができるわけではないが、「彼等の同情者となり友となろうというのがこの学校の校風の一端」である。「昔の塾制度の美点を羨み、規則と規則との鎖にあらずして人格と人格との接触を希うこそ渇者の水に於けるが如きは今日青年の有様であ」る。

(5) 「思斉」とは、論語の「斉しからんことを思う」から借りたこと。「苟も長所があるならば之を尊敬し之に自らも斉しからんことを希うというのはまたこの学校の校風の一であ」る。

直接の命名者も彼だったようだ。藤田の塾論は極めて要領を得たもので、恐らくは塾友（後述するように、当時に習い在塾生、退塾生を総称する意味でこの用語を使用する）の見解を正しく要約していると思われるので、筆者もまずこれによってその輪郭をつかむこととしたい。

2）誕生の経緯

それでは、塾の起こりはいつ頃だったのであろうか。幸助の晩年の回顧によれば、「起源は家庭学校の創設に先立つ」とある[3]。学校創設直前にも、有為の学生が一人、二人と寄宿し書生となって不思議がない程、留岡家の人の出入りは激しかった。しかし、今日の段階でその由来を確かめるすべはない。この点に触れた幾つかの文献・資料を、判明している事実と照合してみると、小塩高恒副校長の以下の回想が最もバランスがとれていてしかも妥当であろう。

それは、初めは横山有策と大塚小一郎「諸兄がここから通学しながら生徒の面倒をみてくれたのが因縁になりて、追追其ういう風の人人が増加し」ていった。「家塾の起りは横山君等がいたことから自然に成長したのである」という叙述である[4]。これは横山を追悼する文章の一節であるが、前号の職員分析の際に手掛かりにした彼の「フースフー」の中にも、「職員で無くて共に校内又は留岡宅に同居して生活せしものに大塚小一郎、横山有策、上野福松、赤羽巌穴、なんどを初めとして」という叙述がある[5]。これも、思斉塾の起源に触れた文章の一部である。

先の横山追悼文によると、「僕が初めて君と相知ったのは明治三十四年の春である。其時君は郷里の中学を終えて上京し、早稲田専門学校文学部に入りて英文学の研究を始め、而しておぢさんの家から通学したのである。（中略）当時留岡のおぢさんの家は狭くて子供が多くて、家庭学校も一棟だけしかないので、君に特別一室をあてがうと云うわけに行かず、やむなく家族舎の玄関の一室を君の書斎としたように記憶する。（中略）君は下宿屋から通う具合に専門に勉強ばかりして居なかった」。学校の使い走りをやり、生徒に勉強を教えて心服させ、従弟たちの面倒を見、おまけに朝の礼拝の当番もした。幸助の五男、健助は当時を回想して塾生を「態のよい

居候」と評した[6]が、居候の側からすればなかなかどうして、楽ではなかったようなのである。

林癸未夫早稲田大学政経学部教授の「横山有策君履歴」によれば、彼が岡山県立高梁中学校を卒業して上京、家庭学校に寄宿するのは1900(明治33)年であり、翌春、東京専門学校に入学した、と記されている[7]。小塩が家庭学校に教頭として採用される時期は、自筆の履歴書によると1900年6月(同年7月と書かれたものと二通りある)であるから、二人が出会う時期は小塩の記憶より少し前になる筈である。もっとも、小塩の言う「相知った」は、単に知り合ったのではなく、面識ができて親しくなった語意かもしれないし、彼が採用された時期と実際の赴任時期がずれた可能性もある。しかし、いずれにせよ小塩の回想は伝聞に基づくものではないし、先の「横山有策君履歴」の記述を補強資料にすれば、藤田の言う通り塾の起源は学校創設と「殆ど同時期」だと判断してよいであろう。

確実に塾の前史を形成した次の居候は、大塚小一郎である。彼は幸助の親友、大塚素の実弟で、1897(明治30)年に同志社高等普通学校(三年制、同志社専門学校・同志社大学の前身)を卒業、仙台の二高に進んで1901年、卒業した。彼はこの年に上京し、1904年に東京帝大法科大学政治学科を卒業するまで家庭学校内に寄宿した。1901年11月には慈善事業師範部の英語教師に狩り出されている程で、彼もまた、雑用係として忙しく立ち働きながら最高学府を終えた塾生の草分けである[8]。後述する『思斉塾友名簿』では、彼の入塾時期は明治39(1906)年となっているが、これは明らかな誤記である。第一、この当時彼はすでに日本銀行に就職(東京帝大卒業と同時)していて、とても雑用係を引き受けられる暇などなかった筈である。

先の「フースフー」に名前のある上野福松、赤羽巌穴の二人が、いつ頃塾の前史と関わったかは不明である。まず上野という姓から、家庭学校の最初の教師、上野他七郎の縁籍ではないかと疑ったが残念ながらはずれた。いくら調べても浮かんでこないこの人物の、今度は名の方にこだわってみると、道庁技手から社名淵分校農場主任となった福田福松という人物のことが気になってきた。夫人りく子(旧姓袖山)も巣鴨本校教師である。昔

の人は実によく姓も名も変えた。今は、同一人物ではないかと思っている。

一方、赤羽の方はかなりの著名人である。履歴を調べると家庭学校創設期には雑誌『革新』、『警世』の記者であった。内村鑑三との関係も深く、家庭学校と交渉があったのは1902年に渡米し、社会主義運動に傾斜する以前ではなかろうか。もっとも、この類の人物は他に何人もいた可能性がある。たまたま小塩の記憶に残る赤羽の名が挙げられたに過ぎないのではないか。例えば、歴史研究文献の中に、後に代表的な国家社会主義者となる高畠素之が、1907（明治40）年に同志社を退学して上京し「巣鴨の家庭学校の教師をし、前橋に帰ってからは夜学校の教師をした」という記述がある[9]。筆者の調査からはその痕跡すら見出せないが、全くのでたらめとは言いきれまい。高畠の周辺にそれらしい、例えば一時期寄宿して実際に生徒の教育を手伝ったとか、そういう記録があったとしてもおかしくはないのである。初期の頃の日誌を追ってみると、家庭学校には種々雑多な客人が頻繁に出入りしていた様子がうかがえる[10]。

3）塾生の日課と生活体験

塾の体制が整ってくるのは明治末年で、大正期にかけてその全盛期が訪れる。その期間は、学校経営が軌道に乗り二つの分校を開設してさらに事業が拡充され、展開する時期とほぼ合致する。

全盛期の塾生たちはどんな生活を送っていたのであろうか。しかし、前史を形づくった人々はともかく、この期間内でも生活した年代によって、生活環境にも意識や考え方にも違いがあり得る。従って、年代ごとに三つぐらいのグループに分類して考察してみるのが妥当である（①「思斉塾」の呼称が確定する頃の、最初のピーク期の塾生群、②大正初期から中期にかけて在塾した塾生群、③大正末期の塾生群）が、塾体験の肉声を戦前の記録にとどめている者は極めて限られ、しかも第一群に偏っている。そこで、とりあえず幾人かの証言から、当時の塾生活の一端を描き出してみることにする。

塾生の日課は、一年中、五時半起床と同時に水浴をすることから始まる。大変なのは毎日、朝夕に当番を決めて塾内ばかりか、校内、校庭、校外の

道路までくまなく清掃することであった。この大仕事は、通称「ラスキンサービス」と呼ばれた。また、日曜日午前十時からの礼拝と、金曜日午後七時からの祈祷会への出席が義務づけられていた。これらの励行義務は、職員、生徒の場合と全く同じであり、塾生はここで生活する限り、正規のスタッフと対等の扱いを受けたのである。他にも、生徒の夜学授業や日曜学校の教授、各種学校行事への参加はおろかその下準備と客人の応対等々、枚挙にいとまがない。すっかり音をあげて要領よくさぼり出す者や、さっさと下宿屋へ逃げ出す者もいたらしい。雑誌『人道』などに、後年思い出を語っている人々などは、おおむね塾精神に忠実な優等生だったのであろう。

けれども、一方で楽しい行事もいくつかあった。クリスマス等の機会には宗教劇、英語劇を上演したり、ダンスに興じたりした。実りの秋には、校庭に植えられた沢山の栗の木から落ちたいが栗を、生徒たちと剥いては神代先生（注－塾生、勉一の母すみ子）の許へ運ぶ。すると、早速おいしい栗飯が炊かれる。婦人後援会の面々その他の来客と校内の者が一同にうち揃い、毎秋栗飯会が催された。月一回の茶話会、彼等が口を揃えてなつかしがる豚肉会（豚会とも言われた）があった。最盛期には、入退塾の際の歓送迎会も専らこれであった。「手を箸の先で奪い合った」などというユーモラスな証言があるが、食べ盛りの青少年のことだから豚肉のうまさは格別だったとしても、そのいじましい記憶だけが突出するのではない。校長以下の主だった教職員、時には手土産をさげてやってくる塾の卒業生を囲んで歓談し、談笑しあったことどもとワンセットになって、一層彼等の郷愁をかきたてるのであろう。

大正末年に塾生活を体験した数少ない証言者の一人、栗山卓士は、以下のような興味ある実話を披露している。「その頃、塾は僅か四、五人でした。而してその人達を本塾と呼んでいました。まだ本塾生に取扱って貰えない塾見習生が、がやがやと第四家族（舎－筆者注）の二階人であった頃、私も勿論その二階人の一人だった」[11] と。彼は送別会を三度して貰ってようやく三度目に本当の豚会に当たったようだが、三度も入退塾を繰り返し

た豪の者は、証言者の中には他に誰もいない。添付した塾友名簿を一読してみれば判るように、塾生は高等教育を受けつつある青年たちだけではなかった。彼等に混じって、多くの中等教育段階の少年たちが含まれていた。

それでは塾生たちは、校長留岡をどのように受けとめていたのであろうか。確かに、彼等が今日あるのは幸助と家庭学校のお陰であってみれば、到底悪口など言えた義理ではないのである。しかしそれでもなお、彼等の「幸助像」は、暖かく親近感に満ちている。

幸助像のキイワードは、「ゴム長靴」と「自転車」である。藤田俱次郎とほぼ同時期に在塾した江見節男は、「留岡校長の元気ある生活は驚くべきもので、朝六時前には冷水風呂に浴しつつ、讃美歌をほがらかに口にせられつつ朝の集まりに、つづいて広き庭の掃除に、それより自転車にて内務省へと中々忙しい風に見うけられたのであります。雨の日も霜どけの日もゴムの長靴は先生のお供をして居ったことも目に見ゆる様であります。ある人は留岡先生に、馬車の馬のようなもので無茶苦茶に体を使い、こんな風では其下に働らくものは到底やりきれないと申して居った位でした。この有様を見た二十歳前の自分達は、自然朝早く起きて冷水風呂にも入れば部屋の掃除は勿論廊下の水拭きまで、又暇あれば庭の掃除も手伝う様になったのであります」と回顧する[12]。さらに、藤田と同期の国友栄五郎も、「明治の末期、大正二三年頃の家庭学校付近は少しでも雨が降ろうものなら（中略）普通の革靴位では出入りすることは容易のことではなかった。そこで先生はゴム長靴を手に入れられた。先生がゴム長靴を穿かれながら雨の土砂降りの中を自転車を押しながら泥寧の細い坂道を帰って来られる姿こそ感激の極みであった」と語っている[13]。二人の証言は、幸助の彼等に及ぼした影響力が、直接語って聞かせた結果であるよりも、その生き方を通して身をもって示した結果であることを如実に伝えている。

関東大震災の被害を案じて、在米の平田宗一、在チューリッヒの村上恵二から届いた心のこもる通信[14]、朝鮮の勤務先から元気に近況を報じる網野林次の通信[15]、幸助が橋本富三郎に宛てた書簡[16]等は、いずれも家庭学校と彼等のきずなの深さ、幸助と彼らの間の交情の確かさを伝えて余りある。

栗山卓士と今井政太の二人が、水風呂の中で校長から聞かされた「若し僕が今の青年だったら、何を置いても労働運動に投じている」という話は、晩年の幸助の、自分が神様と出会っていなければきっと強烈な民権論者になって入獄はおろかどんな間違いを犯したかわからない、という有名な述懐に照らしてみると実に興味深い[17]。今井の方は「牧師として主の道を説いて幾分先生の意思を守っているのに、私は（中略）神のよき僕ともなれず、さりとて労働運動に手を出すでもなく」、田舎にこもっていい加減なことを「純真な人々に教えつつ、言葉の遊戯に安んじているのはいささか恥ずかしい」。栗山は、そんな感慨を文面の片隅にのぞかせている[18]。

2．思斉塾友の動態

1）『思斉塾友名簿』の性格と背景

最初に、拙文の末尾に添付した『思斉塾友名簿』（以下、新名簿と略す）について、最低限の説明をしておきたい。新名簿には『思斉塾友名簿（附消息一束）』（1925－大正14年12月調べ[19]、東京家庭学校所蔵、以下、旧名簿と略す）133名を基礎に、さらに３名を加えた136名が掲載されている。今井譲東京家庭学校長によると、同校に現存する資料の中にこれ以外の塾関連名簿は見当たらないとのことである。旧名簿の発行所は「家庭学校内思斉塾」である。「照会中」の者が26名いるところから、代表グループが国の内外に散らばる塾友と連絡を取りながら作成に当たったものと思われる。

旧名簿の記載事項は「出身地」（道府県名）、「入塾年」、「現住所及び職業」、「氏名（五十音順）」、「出身校」（当時の最終学校名）の五項目である。これらを生かしながら、新名簿では七項目に再編成した（細目は「凡例」参照のこと）。

旧名簿収録者は、1925年12月以前の入塾生に限られるから、それ以降の入塾生の氏名その他が判明すれば、当然新名簿には加えなければならない。『留岡幸助日記』（矯正協会、以下、『日記』と略す）には、1929（昭和４）年５月19日に「思斉塾にて懇談会あり」の記述があるのを最後に、それ以降は全く記述がない。この年に何が日本、いや世界を襲ったかを想起すれ

ばある種の推測が成り立つが、この頃すでに、幸助自身の健康もおもわしくなくなっていた。昭和恐慌期の財源難[20]に加え大黒柱が病と闘うに至っては、たとえ塾の伝統が細々と守られていたにせよ、もはや副業としての塾運営を継続する余力はほとんど失われていたと判断しなければならない。

それ以前の『日記』にも塾生についての記述はあるが、氏名が明記されている者は1名（村上節太郎－「1927年4月21日」の項参照）のみであった。従って、新名簿には先述した赤羽、上野を含む3名を加えたのみである。しかし、全員が含まれていないにしても、旧名簿を下敷きにしたこの新名簿から塾友の動態を分析することは、塾の歩みからしてあながち不当とは言えない。むしろ分析を困難にさせる理由は、後述するように別のところにある。

旧名簿には、幸助の実子6名（男子のみ）が含まれるばかりか、藤原義江、小栗常太郎の他にも家庭学校の卒業生がかなり含まれていると推察される[21]。しかし、拙文冒頭の幸助による塾生の定義をよく読めば、彼等もまた塾友の範囲に含めて差し支えないのである。いやむしろ、彼は塾生の実情に合うように、後から定義づけを工夫したに相違ない。そして何よりも、旧名簿への掲載基準は塾体験者たちの合議で決定されたに相違ないから、今日の時点で再検討する余地はないと筆者は考える。思斉塾というユニークな“錬成道場”の特質は、旧名簿の多彩なメンバー構成の中にこそ端的に現れているからである。

旧名簿は、確かに貴重な資料には違いないが著しく不備なものである。「氏名」以外の四項目すべてに記載がある者は、わずか67名（50.4％）に過ぎない。ことに、「入塾年」不明者が57名、「現住所及び職業」のうち職業が不明な者が54名いる。さすがに「出身地」不明者（5名）、「出身校」不明者（25名）は少ないが、いずれにせよ、この旧名簿のみに依拠して動態分析を行うには到底無理がある。

そこで、『人道』、『日記』を主とした家庭学校関係史・資料、『日本キリスト教歴史大事典』（教文館、1988年）、『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』（戦前期官僚制研究会編／秦郁彦著、東大出版会、1981年）他の

専門的な人名録、『会員氏名録』（学士会発行、1934年）、『人事興信録』（人事興信社、1903年より不定期刊）、『全日本紳士録』（人事興信所、1947年より隔年刊）他の一般的な人名録をも活用し、旧名簿を加筆修正して新たな名簿を作成する必要が生じたわけである。もちろん筆者の再調査能力の限界もあり、これとて分析に耐え得る正確な基礎データにはほど遠い。そうした限界を認めた上で、これによって以下、分析を進めることにしたい。

2）『思斉塾友名簿』の分析

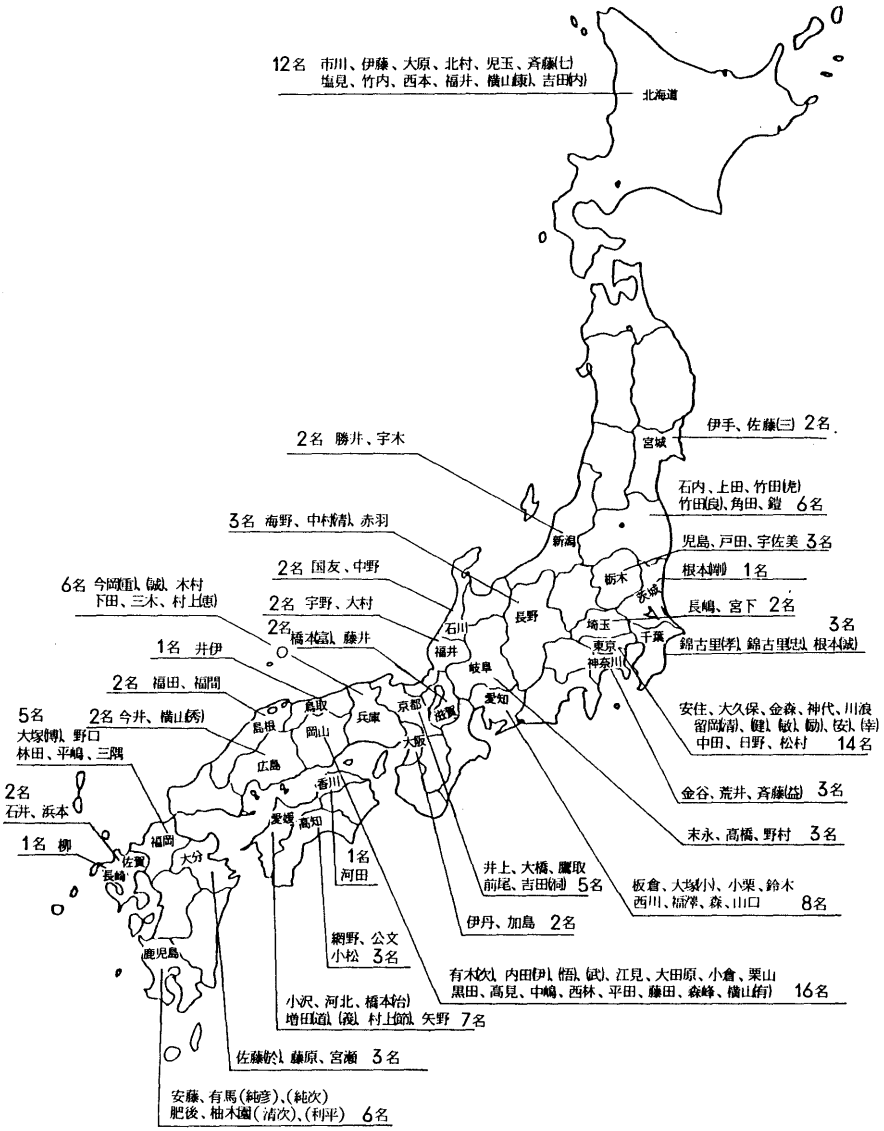
(1) 出身地の分布

新名簿には、136名中130名の出身道府県名が記載されている。多い順に10府県まで挙げると、岡山16名、東京14名、北海道12名、愛知８名、愛媛７名、福島、兵庫、鹿児島各６名、京都、福岡各５名となる。反対に、ゼロの県が15、１名の県が４あって、塾友の出身地分布には著しい偏りがあることがわかる（図１参照）。

こうした場合、大抵は出身者がいないのは何故かを問うよりも、何故多いのかを問う方が実際的である。ゼロが１になるかならないかは偶然に左右されるが、多い府県にはそれなりの理由がある場合が多いからである。少なくとも、そう疑ってかからなければならない程度の偏りがあるということになろうか。多い府県のうち、東京出身者は幸助の息子たちを除けば８名に減るから、幸助の郷里、岡山県出身者の多さが一層目立ってくる。

新時代を象徴する日本の中心地東京。東京へは、星雲の志を抱き立身出世を夢見て、多くの田舎青年が攻め上ってくる。しかし、交通事情も通信手段も今より格段に劣る当時のことである。本人以上に父兄の、子弟を単身送り出す不安、心労は並大抵のことではなかったろう。父兄の経済的な負担も、今では考えられない程大きかったのではあるまいか。そこへまたとない朗報が舞いこんでくる。「高梁の幸助さんが東京で慈善事業家かなんか知らんがとにかく偉くなったそうだ。私塾を開いていて私らの子どもの面倒を見てくれるらしい。頼んでみるか」。そういう話になって当然である。それどころか「幸助さんの学校が人手不足で大変だそうだ。うちの

図1　出身地の分布


12名　市川、伊藤、大原、北村、児玉、斉藤(七)
塩見、竹内、西本、福井、横山(祿)、吉田(内)
北海道
伊手、佐藤(三)　2名
宮城
2名　勝井、宇木
石内、上田、竹田(虎)
竹田(良)、角田、鎧　6名
3名　海野、中林(清)、赤羽
新潟
児島、戸田、宇佐美　3名
2名　国友、中野
栃木
根本(剛)　1名
6名　今岡(重)、(誠)、木村
下田、三木、村上(恵)
2名　宇野、大村
茨城
長嶋、宮下　2名
2名　橋本(富)、藤井
長野
埼玉
3名
1名　井伊
石川
千葉
錦古里(孝)、錦古里(忠)、根本(誠)
福井
東京、
神奈川
2名　福田、福間
岐阜
鳥取
京都
愛知
滋賀
5名
2名　今井、横山(秀)
島根
兵庫
大塚(博)、野口
林田、平嶋、三隅
岡山
大阪
安住、大久保、金森、神代、川浪
留岡(南)、健)、敏)、勵)、(安)、(幸)
中田、日野、松村　14名
広島
2名
石井、浜本
香川
愛媛
高知
金谷、荒井、斉藤(益)　3名
末永、高橋、野村　3名
1名　柳
福岡
佐賀
大分
長崎
1名
河田
井上、大橋、鷹取
前尾、吉田(伺)　5名
板倉、大塚(小)、小栗、鈴木
西川、福澤、森、山口　8名
伊丹、加島　2名
網野、公文
小松　3名
鹿児島
有木(次)、内田(伊)、(悟)、(武)、江見、大田原、小倉、栗山
黒田、高見、中嶋、西林、平田、藤田、森峰、横山(治)　16名
小沢、河北、橋本(治)
増田(道)、(後)、村上(俊)、矢野　7名
佐藤(於)、藤原、宮瀬　3名
安藤、有馬(純彦)、(純次)
肥後、柚木園(清次)、(利平)　6名

娘たちを東京へやろうと思う」[22] 「うちの息子の放蕩はますますひどい。幸助さんの学校で鍛えてもらうことにした」[23] 、なんとか生徒と教師をまず整えようとする幸助の念願もあって、とりわけ初期の家庭学校は、高梁とその周辺との地縁に多くを支えられていたのである。

岡山県出身者のうち、江見、栗山、平田、藤田、横山（有）は既に本文に登場した人々であり、高見は前号の職員分析の中に出てきた。内田姓の3名は、苫田郡上加茂村（現在の津山市近郊）一帯の豪農の一族である[24]。森峰耕作は、横山と同じく幸助の先妻夏子の親族で、中嶋章とは塾の同期生であった。小倉章蔵は、東京音楽学校甲種師範科を卒業して順正高等女学校や高梁中学校の音楽教師となる傍ら、高梁教会の長老会員の一人としてオルガニストの任を負い、以後は専ら音楽を業として作曲活動もしている。彼は『日記』にも度々登場する。岡山県出身者の中では、郷里高梁に戻っていぶし銀の光彩を放って生きた数少ない一人である。

実質第二位は北海道出身者である。吉田内次は、社名淵分校職員吉田常太郎（幸助甥）夫妻の次男であり、塩見主一は、恐らく幸助と同志社英学校別科神学科の同級生で伝道師、塩見孝次郎の息子であろう。他では、藤田と塾経験がだぶり次の塾長となった福井隆一[25]以下の数名を除くと、「出身地」以外は不備な者が多い。入塾年判明者から推して、彼等のほぼ全員は社名淵分校創設（1914－大正3年夏）以降の入塾生であろう。社名淵分校の卒業生が何人か含まれていてもおかしくはない。

東京は、地方人相互の雑居形態を常時複雑に包含する都市である。東京を除くと愛知県が続くが、先に紹介した大塚小一郎、幸助の北米遊学に同行した巣鴨本校の卒業生で民間飛行家の小栗常太郎以外、筆者には馴染みの薄い人名が並ぶ。ただ愛知県には、全国の農村青年に地方改良運動を通じて大きな影響力を持ち続けた山崎延吉安城農林学校長が、戦後まで健在であった事実を想起する必要がある[26]。

次は愛媛県の出番である。河北実は恐らく初期の家庭学校職員、河北夫妻の息子か親族であろう。愛媛県出身者が何故多いかは、以下の増田道義

の回想を充てるだけで十分である。徳富盧花の『黒い眼と茶色の目』に出てくる富岡は幸助で、敬二（盧花がモデル）の「ライバル町田は私の伯父増田雅太郎、伊予の教会の総代町田さんは私の祖父増田精平である。留岡先生は明治十四年十七歳の時故郷高梁での迫害を避け今治に来られたが、増田一家は先生を厚遇した」。おまけに母の従姉ため子が幸助夫人夏子とは神戸の女子伝道学校（現在の聖和大学）以来の親友で、夏子臨終の際には駿河台の高田病院にかけつけて世話をしたというし、ため子の夫は、家庭学校に広大な土地が払い下げられた時の北海道庁拓殖部長西村保吉であったというから念が入っている。絵に書いたような話ではないか[27]。もう一人の増田姓（義男）も彼の兄弟か親族であろう。村上（節）は、先述したように少年期に入塾した組である。後に、「日本の柑橘栽培地域の発達と移動」で農学博士になっており、幸助が膝をたたいて喜びそうな研究テーマである。

6名、5名の出身県は、いずれも複数で計5県ある。その中でも典型的なのは鹿児島県で、安東、有馬兄弟、肥後の4名が幸助の盟友、有馬四郎助の親族である。安東長義は退塾後、家庭学校職員になるし、肥後誠一郎の実父正彦もそうであった。福島県の場合も、角田五郎が幸助の長女富恵の夫、鴫原篤二の縁籍関係にあたると思われる。京都府では、井上良三が初期の中枢を担った職員で、吉田洞介の両親、清次郎、とも子もまたそうであった。福岡県出身者では、大塚博人の紹介者が家庭学校理事で住友財閥の重鎮、小倉正恒である。兵庫県の場合でも筆者が知らないだけで、恐らく家庭学校関係者の誰かと縁故関係にある者が含まれているであろう。

少ない県でもそういうケースがある。例えば千葉県は3名だが、これも家庭学校を代表する職員の一人、錦古里忠次の親族（多分息子たち）2名が含まれるし、岐阜県出身の野村貫一は、同志社出身の実業家で家庭学校のスポンサーの一人、野村洋三の親族、先述した石川県出身の国友栄五郎の紹介者は当時の東京府知事、井上友一（彼も金沢出身）であるという具合に、調べ上げればきりがない程の縁故関係が浮かび上がる。

総じて出身地の分布から言えることは、第一に、彼等の大多数は縁故関

係の網の目を通じて入塾したことである。世間に思斉塾の主旨や目的を徹底させて、広く苦学する有為の青年を公募したというのではない。実際は縁故関係を手段にして、即ち縁故者を保証人に仕立てて入塾候補生の人柄をふるいにかけ、学校の同行者・協力者を再生産していったのである。第二に、その場合の縁故関係には、①留岡家の縁籍、②幸助の地縁、③家庭学校職員の縁籍、④幸助の交友、という四層の濃密な人間関係が交錯しつつ総動員されたことである。商売上の損得勘定ではなしに、副業としての塾運営に相当の資金を提供する無理を続けながら、反面、家庭学校はしっかり元を取っていたという考察も成り立つ。

(2) 出身学校の分布

旧名簿で「出身地」に次いで明確な項目は「出身学校」である。当時の在塾生でその後上級学校に進学した者、新たに判明した者も小数いて、最終的な不明者は136名中23名になる。在塾生でその後の進学先が不明な者もいるので正確ではないが、高等教育段階の者（第一群）が96名、中等教育段階の者（第二群）が17名である。不明者の多くは第二群の者であってしかも、家庭学校の卒業生ではないかと筆者は考えている。第一群の者であれば当時の塾生同士の交友関係から推して、ごく短期間で退塾し故意に交信を避ける者以外、離脱者はほとんどいないと思われるからである。ちなみに、死亡者12名中出身学校不明者は5 名のみである。

塾設立本来の主旨からすれば、第一類の青年群像が分析の中心にならざるを得ない。出身校を多い順に上げると、東京帝大22名、早大18名、この二校が断然で後は慶大（慶応義塾を含む）9 名、東京商大（東京高商を含む）、青山学院各 3 名、北海道帝大、東京外国語学校、東京美術学校、中大（東京法学院を含む）、明大各 2 名となる。1 名の学校は沢山あってここに挙げきれないが、変わったところでは図書館講習所、東京商船学校、海軍兵学校（幸助次男、励）、陸軍士官学校等がある。

官立、私立の色分けでは、96名中官立が49名、私立が43名（不明 4 名）と両者の間に極端な開きはない。「苦学生」のイメージを持ちすぎた筆者などは、学費の安い官立の学校が断然多いのではないかと思っていたのでこ

の数字は少々意外であった。

次は専攻別に見てみよう。まず文科系は、法系、経済系各15名、文系6名、教育系、芸術系各3名、神学系1名の計43名であり、理科系は、農系9名、医系5名、理系、工系各4名、薬系1名の計23名、残りの30名は不明（文科系、理科系の区分が可能でも専攻による分類は不可能な者も含む）である。文科系で法・経の多いのはわかるが、理科系で農・医系、とりわけ農系が最も多いのは幸助の農本的生きかたの構えと関係があるのであろうか、興味深い点である。

他に、出身校の分布を通して気がついた点は、①総じて実学に傾斜していること、②東京の学校のみならず全国の学校に分散していること、③牧師養成と職業軍人養成という、言わば対局にある学校への進学はいずれもごく小数であること、等である。

(3) 退塾後の進路

塾友の動態分析としては、ここが最も重要だとも言える。しかし、前の二項目と違って不明者が激増する。新名簿ですら「退塾後の進路・身分」の項目に記載のない者は、73名（53.7%）に及ぶ。但し、そのうち「備考（その後の職歴他）」の項目でフォローできた者が21名、物故者13名のうち早世して全て不詳の者が11名（調査の絶対的不可能者）いるから、実質的な不明者は41名（30.1%）に減ってくる。

そこで、まず「退塾後の進路・身分」に記載のある63名のみを職業分類してみると、官吏（内務、大蔵、文部、逓信各省、警視庁、岐阜、兵庫各県）10名、教員（小学校3、中学校6、高等女学校1、師範学校2、大学2）14名、感化施設職員2名、図書館司書2名、牧師1名、新聞記者3名、銀行員7名、商社員6名、その他の企業16名、在学2名となる。大まかに分類すると、官庁10、教育関連（感化施設、図書館を含む）18、民間企業（官・民合弁会社を含む）32、その他4となり、退塾直後の進路の主たる傾向がはっきりと見えてくる。

次に、「備考（その後の職歴他）」欄記載事項で補足してみたい。その後も、一貫して同一の職業に従事した者もいるが、戦争等をはさんで転身を

はかった者もかなりいて当然である。この欄に、職業に関する記載のある者は64名である。記載のない者の中には、戦死者や病死者もかなり含まれているであろう。戦前・戦後の人名録で捕捉できた者は、複数の職業が並記されている場合が多い。その場合は最終の職業の方を採ることにして職業分野を多い順に割り出してみると、実業界22名、学界、教育（図書館を含む）界各8名、官界5名、司法界、ジャーナリズム、自営業各4名、医療界3名、政界、社会事業界各2名、音楽界、海軍各1名となり、実業の世界で生きた者が断然多い点を別にすれば、実に多種多様な分野にバランスよく進出していることがわかる。

これは歴史の不幸と大いに関わることであるが、幸か不幸か筆者の個別調査が綿密に行われた者の中には、戦争責任を厳しく問われたケースが幾つかあった。戦時中の大政翼賛会活動（県支部顧問）の責任を問われて戦後すぐに重要な地位を追われた者、戦時中、中国大陸で実業界の要職にありながら「特殊任務を帯びて出張」したことと関係があるのかどうかは不明であるが、戦後社会の表舞台から去ってひっそりと生きた者もいる。後者のケースですぐに思い浮かぶ名前は、極東軍事裁判で極刑に処せられた土肥原賢二大将の、いわゆる“土肥原機関”（謀略特務機関のこと）である。そのスパイ網は、民間人までを強制的に巻き込んで作り上げた強力かつ巧妙なものであったと言われている。もっとも、後者のケースがその暗躍と関連していたかどうかはわからない。そうした可能性もあるというだけである。

こうした不幸は、幸助が頼もしくも思い将来を嘱望してやまなかった、塾の中枢を担う青年たちのその後を襲ったばかりではない。なんと幸助の実子からも、2名の公職追放者[28]を出してしまった。『思斉塾友名簿』のその後は、決して華やかな面だけを取り出して終結し得るものではない。その背後に込められた歴史の教訓を、後学の者は厳しく読みとることが大切なのだと思う。すでに、塾友の大多数はこの世を去っている。筆者の狭い体験で言えば、例えば東京家庭裁判所の初期の首席調査官であった故日野照彦氏などから、十分な聞き取りを行っておかなかったことが悔やまれる。

おわりに－まとめに代えて－

最後に総括的に言えば、第一に、思斉塾という施設は大正デモクラシーの高揚とともにその基盤を固め、昭和恐慌期以降、最大の庇護者である校長留岡の肉体の衰えを直接の契機として衰退していったこと。第二に、第一群の退塾生の多くは“良質な保守主義者”、或は“無類のリベラリスト”として、各界に散り、それぞれの社会的役割を全うしたということ。つまり、当時の人材養成機関としては大きな成果を収めたということができる。こうした教育事業が、多忙を極める一民間施設を舞台に展開されたという事実は、やはり特筆すべきであろう。第三に、第一群の青年たちと第二群の少年たち、さらには家庭学校生徒との相互関係が、「不良少年の教育事業」を本業とするこの学校の教育機能を十二分に高めたであろうこと。筆者は全てがうまくいったなどと思ってはいないが、この学校の経営・運営には、メンタルな意味でのギブアンドテイク方式が貫かれていたことだけは確かである。学費他の面倒を見てもらう代償を、入塾生たちは厳しく求められた。慌てて逃げ出す者がいた程である。その厳しさの背後には、校長以下教職員の暖かい教育的配慮がある。しかもその配慮には、青年、少年（家庭学校卒業生を含む）、生徒という三つのグループ相互の関係をにらんで、その三層構造を活性化する志向性が含まれていた。本来、教育的配慮とはそうしたものであるが、幸助らはさらに踏み込んで、彼等を困難な事態に直面させ、一定時間の経過を踏んで成り行きに任せる方法を併用した。「教育」という言葉の前に「感化」という言葉が置かれるゆえんである。

「入・退塾期間」の分析もいったんは試みてみたが、不明部分が大き過ぎて正確にものを言う自信がないために断念した。不十分な分析に終始してしまったが、思斉塾の歴史的な性格と塾友集団の動態の一端は示し得たと考えている。これ以上の分析は、現在の筆者にとって、能力的にも資料面でも限界があると思っている。研究者各位のご批判を頂ければ幸いである。

注

(1) 留岡幸助「家庭学校の過去十四年」『人道』第92号（1912年12月15日）所収。

(2) 藤田俱次郎「新に命名せし思斉塾」同上。

(3) 留岡幸助「予を語る」牧野虎次編『留岡幸助君古希記念集』1933年、所収、7頁。

(4) 小塩高恒「有策兄逝く」『人道』第283号（1929年5月15日）所収。

(5) 『人道』復刊第49号（1936年5月15日）所収。

(6) 留岡健助「亡父と思斉塾」『留岡幸助著作集　月報5』1981年、同朋舎、参照（以下、『著作集』と略す）。

(7) 『人道』第283号、所収（本号は「横山有策教授追悼号」である）。

(8) 「大塚小一郎氏の長逝を悼む」『人道』復刊第110号（1942年7月15日）参照。

(9) 宮沢邦一郎『日本近代化の精神世界』雄山閣、1988年、41頁。

(10) 「明治三四年家庭学校日誌摘要」『家庭学校（第弐編）－附録』1902年10月、参照。

(11) 栗山卓士「十年前」『人道』第303号（1931年1月15日）所収。

(12) 江見節男「思斉塾にありし日のことども」同上。

(13) 国友栄五郎「留岡先生の面影」『人道』復刊第23号（1935年4月15日）所収。

(14) 平田宗一「ミス、ヒウマニテイー」、村上恵二「瑞西国より」『人道』第219号（1923年12月15日）所収。

(15) 網野林二「朝鮮水原より」『人道』第265号（1927年1月15日）所収。

(16) 今井新太郎「留岡幸助先生より橋本富三郎氏宛の書簡抜粋」『人道』復刊第126号（1943年11月15日）所収。

(17) 『留岡幸助君古希記念集』前掲、27頁。

(18) 栗山、前掲。

(19) 拙稿「戦前における家庭学校職員集団の形成と特質」『社会問題研究』第105号、1991年3月、97頁の注記で旧名簿の刊行時期を「1923年12月」としたのは、筆者の校正ミスである。深くお詫びしたい。

(20) 家庭学校が、全支出のうち一体どの程度の金額を塾運営にあてたかは明確ではない。大正期の要覧『家庭学校』（巻末年譜の最後の年・月記載事項から推して1920－大正9年刊行か？）の「収支一覧」を見ても、慈善事業師範部、『人道』の発刊費と思斉塾の費用が込みになっている(29－31頁)。なお、『人道』第167号（1919年4月26日）には「留岡励大尉香資金1200

円を思斉塾新築資金の内に寄付す」の記事がある。

(21) 藤田俱次郎「思斉塾生活を思出して」（『人道』第303号）の中に、当時「少年所で今のテナーの名手藤原義江君も居られた」という記述がある。先の栗山卓士の回想とも重なるが、塾内の中等教育段階の少年には家庭学校の卒業生と地方の縁故者の子弟とがいて、生活を共にしていたように思われる。前者の場合は、進路が決定して本人が安定するまでのアフターケアの意味合いが濃く、後者の場合は、受験勉強も含めて高等教育の機会を得るための準備段階として、ともに学校側が受け入れていたのではないだろうか。後者については、『日記』にそれらしい記述が散見される（本文で触れた村上節太郎のケース他）し、前者については、最新の直木賞作家が描き出した藤原義江伝が筆者の類推の根拠になっている（拙稿「古川薫『漂泊者のアリア』に学ぶこと」『社会問題研究』第105号所収、参照）。

(22) 幸助の「母上病床日記」（『日記』第一巻、1896－明治29年10月8－29日）に出てくる近所の婦人に安藤という人がいるが、初期家庭学校職員の安藤とも子、さく子姉妹の母親であると思われる。

(23) 初期を代表する家庭学校生徒の一人、信木杢三郎は後年、自分は「先生の生家から四、五軒筋向こうの高梁新町に生まれ」幸助の姉たちにとても可愛がられた、と語っている。この鼻垂れ小僧が幸助のもとに送られた理由は省くが、彼の育ちからすれば単なる縁故関係など通り越して、もはや身内のようなものである（「留岡先生と私」『留岡幸助永眠十周年・山室軍平永眠三年追憶記念集』岡山県社会事業協会、1944年、所収）。

(24) 幸助の「岡山方面視察」（『日記』第三巻、1912－大正元年８月9－13日）には、江見、西林らの塾生と津山駅にて会い、内田証一郎（塾生の悟六、実兄）の案内で上加茂村に赴き、内田一族と親しく語りあった様が記されている。

(25) 福井の入塾時期は定かでないが、注21）にある藤田の回想記では、同時期の塾生として江見、神代らと一緒に福井の名も挙げられている。

(26) 幸助と山崎の間柄がいかに深かったかは、社名淵分校創設期に全国の同志宛に発信した記録『社名淵分校発信簿』（発信総数1088、拙稿「家庭学校の同行者たち－『社名淵分校発信簿』を手がかりとして－」『社会福祉実践史の総合的分析』昭和63年度科研費報告書、所収、参照）によると、大久保利武に次いで二番目に封書が送られている事実からもうかがえる。山崎の返信内容は、幸助の「書簡より受くる教訓」（『人道』第116号、1914－大正３年12月15日）に紹介されている。

(27) 増田道義「留岡幸助先生の想い出」『著作集　月報1』1978年、同朋舎、参照。

(28) 秦郁彦、袖井林二郎『日本占領秘史・下』早川書店、1986年、216頁以下の「公職追放」の項を参照されたい。また、戦争責任に関する本格的な研究書としては、家永三郎『戦争責任』（岩波書店、1985年）がある。

思 斉 塾 友 名 簿

【凡　例】

1．原簿（旧名簿）の記載事項に明らかな誤記があった場合は訂正し、疑問があるか誤記ではないかと思われる場合は、「備考」欄に付記した。
2．原簿（旧名簿）の不明箇所のうち、現時点で判明している事実は加筆した。
3．「入塾・退塾時期」は、西暦年・月で表示した。なお「備考」欄の数字は、巻・号以外すべて西暦年・月（日）を意味する。
4．「出身校」は原則として最終学校名を記し、高等教育機関の場合、学校名を簡略化し学部・学科（専攻）は頭文字のみを記した。なお、校名は当時の呼称に従った。現在の校名との対照表は以下の通りである。

東京法学院→中央大	東京高師　東京文理大→筑波大
東北帝大農→北大農	京都府立医専→京都府立医大
秋田鉱専→秋田大鉱山	慶応義塾理財→慶大経
同志社普通学校→同志社高校	静岡高校→静岡大教養
成蹊実務学院→成蹊大	盛岡高等農林→岩手大農
東京高工→東京工大	東京薬学校→東京薬科大
東京工学校→芝浦工大	横浜高商→横浜国大経
東京商船学校→東京商船大	横浜高工→横浜国大工
青山師範　豊島師範→東京学芸大教	日本医学校→日本医大
愛知県立医大→名古屋大医	二高→東北大教養
高千穂高商→高千穂商大	慈恵会医院医専→東京慈恵会医大
八高→名古屋大教養	東京高商　東京商大→一橋大
浦和高→埼玉大教養	図書館講習所→図書館大
埼玉師範学校→埼玉大教	米沢工専→山形大工
東京音楽学校→東京芸大音	東京物理学校→東京理科大
東京美術学校→東京芸大美	青山学院高商→青山学院大経
京都高等蚕糸学校→京都工芸繊維大	小樽高商→小樽商大

出典：「高等教育機関一覧」『日本史総覧Ⅵ　近代・現代』所収

思斉塾友名簿

※は塾長経験者　　（五十音順）

氏　名	出身地	入塾時期	退塾時期	出　身　校	退塾後の進路・身分	備考（その後の職歴等）
赤羽　一	長野			東京法学院	神戸新聞記者	号巌穴　平民新聞記者他　獄死
安住　仕	東京			早大		安積？　兵役中に急逝（1920）
網野　林次	高知	1924.	1927.4	早大法・英法	朝鮮東山農事㈱社員	横浜市役所勤務を経て、高知市で弁護士開業　日弁連人権擁護委員
安東　長義	鹿児島	1908.		同志社大神	根岸家庭学園職員	職員名簿参照　薬石日報㈱専務取締役他　有馬四郎助夫人実弟
荒井　勇吉	神奈川			東北帝大農		雄吉（東京帝大大学院農修了）？
有木　次男	岡山	1910.		秋田鉱専	大阪府中学校教員	岸和田中学校教諭（1925.12現在）
有馬　純彦	鹿児島			同志社普通学校		四郎助長男　救世軍士官学校他へ欧米留学　横浜家庭学園長
有馬　純次	鹿児島			愛知県農業学校		四郎助次男　横浜力行舎主任
井伊玄太郎	鳥取	1918.		早大政経・経済	早大政経学部講師	早大名誉教授　桜美林大教授（社会思想史）妻、田鶴は神戸女学院教授
飯田　元一				成渓実務専門（ママ）		山口銀行勤務（在大阪、1925.12現在）成蹊実務学院の誤記か？
石井　正	佐賀			早稲田中学校		死亡（1925.12 現在）
石内真太郎	福島	1918.		工科校		死亡（　〃　）東京高工または東京工学校の略か？
板倉　晴一	愛知	1920.		中央大	横浜原合名会社勤務	同生糸売込部（1925.12 現在）
伊丹要之助	大阪			東京商船学校		
市川　勝一	北海道	1918.		早稲田実業		
伊手　衡	宮城	1915.		東京帝大法	内務省属	内閣賞勲局書記官他
伊藤　孝治	北海道			京北実業		
井上　良三	京都				家庭学校職員	職員名簿参照
今井　政太	広島	1921.		青山学院	牧師	栗山の回想（『人道』303）参照
今岡　重正	兵庫	1918.		早大商	富士製紙㈱勤務	同芝川工場勤務（1925.12現在）
今岡　誠一	兵庫			早大	ライジングサン石油㈱勤務	同秋田出張所勤務（1925.12現在）
上田　正八	福島	1911.		青山師範	福島県小学校教員	耶麻郡堂島小学校訓導（同上）

氏　名	出身地	入塾時期	退塾時期	出　身　校	退塾後の進路・身分	備考（その後の職歴他）
上野　福松						改姓福田？
宇木豊三郎	新潟	1920.		東京商工		平和活版所勤務(1925.12現在)
宇佐美　進	栃木	1909.　？		愛知県立医大		ウィーンで医学研究中（同上）『日記』(1909.10.7）に入塾？の記述あり
内田伊代吉	岡山					
内田　悟六	岡山			慶応義塾		死亡（1925.10.6,41歳）
内田武士郎	岡山	1913.　？		東北帝大農・農学実科		1911. 秋、進学のため退塾の記事あり(『人道』78)
宇野　三一	福井					
海野小太郎	長野	1921.		日大予科在学		
※江見　節男	岡山	1909.9		東京帝大理・純正化学	明治学院普通部舎監	高千穂高商、八高、浦和高教授 静岡大工学部長他
大久保　龍	東京	1912.		豊島師範	真砂町小学校訓導	本郷追分小学校長他　戦後府中文化幼稚園長
太田原盛治	岡山					
大塚小一郎	愛知	1901.	1904.	東京帝大法・政治	日本銀行勤務	同国庫局長　安田貯蓄銀行専務 素実弟　元慈善事業師範部英語教師
大塚　博人	福岡	1922.		早大	国立国会図書館勤務	同受入整理部編成課長他
大槻　隆久						
大橋　源吾	京都					
大原　武夫	北海道		1914.　？	東京外語・英語	文部省勤務	大阪毎日新聞社編集局総務　毎日新聞名古屋支社長　阿部正恒長男
大村　実	福井			郁文館中学校		在アラスカ　職員名簿参照
小倉　章蔵	岡山	1910.4	1914.	東京音楽学校師範科	岡山順正高女教諭	近江郡是工場他で音楽指導　高梁中学校教諭　高梁教会オルガニスト
小栗常太郎	愛知					卒業生　幸助の北米遊学に同行 民間飛行家　自動車会社設立
尾澤　慶忠	愛媛			東京帝大農		京都高等蚕学校教授
加島　克己	大阪	1925.		天王寺中学校		

氏　名	出身地	入塾時期	退塾時期	出　身　校	退塾後の進路・身分	備考（その後の職歴他）
片山恭一郎		1902.		京都府立医専		朝鮮総督府保健技師（1910～渡鮮）
勝井和三郎	新潟					
金森弥一郎	東京	1916.		明治大	㈱尾張屋銀行勤務	鉦弥親族？　1917.2. 没
金谷作次郎	神奈川	1913.		海城中学校		熱海で物品販売業(1925.12現在)
※神代　勉一	東京	1909.		慶応義塾理財	三井物産勤務	台北支店長　奉天出張所長代理実母すみ子（職員名簿参照）
河北　実	愛媛					死亡（1925.12 現在）秀雄、伸代夫妻（職員名簿参照）親族？
河田喜代助	香川	1924.	1926.4	東京高師理科、東北帝大理・地質	埼玉師範学校勤務	満州国交通部大陸科学院研究官他
川浪　幸一	東京			慶大		
北村藤三郎	北海道					
※木村　重樹	兵庫	1915.	1917.3	東京帝大法・政治	日本製油㈱勤務	朝鮮咸興炭礦鉄道他支配人他
国友栄五郎	石川	1911.		京都帝大法・政治	東神倉庫㈱東京支店	旧姓渡辺　井上友一の紹介
公文　貞行	高知	1921.	1927. 春	早大法		浦和に法律事務所開業（弁護士、計理士、税理士）　日弁連副会長
栗山　卓士	岡山	1921.		静岡高校在学		『日記』(1929.3.22) に「栗山文学士」の記述あり
黒田　愛次	岡山			国民英学会		
児島　孝一	栃木					死亡（1925.12 現在）
児玉　亨	北海道			早大		
小松辰之助	高知			宮城農林		死亡（1925.12 現在）盛岡高等農林の誤記か？
斎藤　七郎	北海道	1924.		早高在学		早稲田高等学院の略
斉藤　益夫	神奈川					死亡（1925.12 現在）
佐藤於兎彦	大分	1924.	1925. 春	東京美術学校		
佐藤　三郎	宮城	1924.	1926.4	早大	報知新聞社勤務	毎日新聞東京本社編集局連絡部長他
佐藤　新吉				殖民学校		
塩見　主一	北海道			東京薬学校		圭一？　孝次郎親族？
下田　英男	兵庫	1917.		慶応義塾理財	逓信省貯金局勤務	

氏　名	出身地	入塾時期	退塾時期	出　身　校	退塾後の進路・身分	備考（その後の職歴他）
末永　一	岐阜	1922.		横浜商工		横浜高商または横浜高工の誤記か？
鈴木　義一	愛知	1911.		東京帝大農・農学実科	愛知県中等学校教員	新城農蚕学校教諭(1925.12現在)
鷹取　常時	京都	1925.		日本医学校在学		
高橋　清水	岐阜	1917.		慶応義塾理財	三井銀行	
高見　登一	岡山				古谷商会(在ｼｱﾄﾙ)	職員名簿参照　健一の兄弟？
竹内　基雄	北海道					
竹田　虎雄	福島	1913.		早大理工・機械	富士電機製造㈱勤務	富士プラスチック機械㈱会長
竹田　良基	福島					虎雄の兄弟？
角田　五郎	福島	1918.		慶応義塾理財	山八銀行勤務	同頭取他　鴨原大三郎五男
戸田　如水	栃木			早大	岸飛行機研究所技師	航空機材工業㈱津田沼製作所長
留岡　清男	東京	1921.		東京帝大文・心理	東京農大講師	法政大学教授　戦後公職追放 北大教育学部教授他　職員名簿参照
留岡　健助	東京	1922.		青山学院	名古屋明治銀行勤務	戦時中、軍属でシンガポール在
留岡　敏	東京	1906.	1911. 秋	東京帝大農・林学	二高進学	岩倉鉄道学校主　留岡建設会社社長
留岡　励	東京			海軍兵学校		大尉　飛行訓練中殉職(1918.12.12)
留岡　安男	東京			早大		
留岡　幸男	東京	1919.		東京帝大法・独法	兵庫県属　内務部地方課勤務	内務省地方局長　警視総監　北海道庁長官　戦後公職追放
中嶋　章	岡山	1921.	1928. 春	早大	山下汽船㈱勤務	本社株式課長(1952.現在)
長嶋　新	埼玉					
中田　清	東京			東京美術学校		
中野　喜孝	石川			立教大		
中村　清三	長野	1909.		早稲田実業	長野県小学校勤務	小諸駅構内売店経営
西川　八郎	愛知			慈恵会医院医専		
錦古里孝治	千葉	1908.		京北中学校	写真技師	孝次？　忠次（職員名簿参照）次男
錦古里忠久	千葉	1908.	1912. ？	早大商	東京日日新聞社勤務	同事業部助役他　忠次長男？ 隆太郎改名？
西林　卓	岡山					

氏　名	出身地	入塾時期	退塾時期	出　身　校	退塾後の進路・身分	備考（その後の職歴他）
西本　義信	北海道	1917.		東京商大	中外文具㈱勤務	
根本　剛	茨城	1914.	1917.	東京帝大文・英文	新潟中学校教諭	中央大学教授
根本　誠	千葉	1925.		関西中学校	在塾	
野口　益男	福岡	1925.	1926.4	図書館講習所	浅野候図書館勤務	在広島市
野村　貫一	岐阜	1912.	1914.　？	東京帝大農・水産		横浜サムライ商会主、野村洋三親族
※橋本富三郎	滋賀	1910.	1914.6	早大政経・政治	大原紡績会社勤務	合同新聞社長　岡山市長
橋本　治雄	愛媛					在ブラジル(1925.12現在)
浜本弥三郎	佐賀	1916.		東京高師	大阪府中学校教員	愛知県立新城女学校長他
林田　義実	福岡	1917.　？	東京外語			号、奇人　尺八の専門家
肥後誠一郎	鹿児島	1915.	1918.	東京帝大・政治	鈴木商店（在神戸）勤務	台北カネタツ会社設立　州会議員他　正彦、ミネ（職員名簿参照）長男
日野　照彦	東京	1922.　？		東京帝大法・独法	文部省社会教育会勤務	大連高商、米沢工専教授　戦後、東京家裁上席・首席調査官
平嶋　俊明	福岡		1919.　？	東京帝大法・英法	三井物産勤務	室町物産㈱社長
平田　宗市	岡山			関西中学校		在米（1925.12.現在）
※福井　隆一	北海道		1915.	慶応義塾理財	朝鮮銀行検査課勤務	遼陽支店他支配人　天津銀行頭取他
福澤　卯介	愛知	1912.		明治大		
福田　克己	島根					死亡(1925.12現在)
福間　典海	島根	1910.	1911.　？	東京帝大文	福岡県女子師範教諭	旧姓三澤　広島県忠海中学校長他
藤井辰次郎	滋賀	1910.				
※藤田偵次郎	岡山	1911.　末	1913.2頃	東京帝大法・英法	岐阜県属	秋田県警察部長他　台南、台北各州知事　妻、貞子は二宮邦次郎次女
藤原　義江	大分	1911.	1913.	早稲田実業他中退		卒業生　声楽家
前尾繁三郎	京都	1923.		東京帝大法・法律	大蔵省属　預金部勤務	大蔵省主税局長、造幣局長　通産相　法相　衆議院議長他
増田　道義	愛媛	1925.2	1926.2	東京帝大法・法律 同大学院	警視庁属	京城法学専門学校長　陸軍司政長官　弁護士　第一東京弁護士会副会長

氏　名	出身地	入塾時期	退塾時期	出身校	退塾後の進路・身分	備考（その後の職歴他）
増田　義男	愛媛	1905.		東京高商		満州船渠㈱（在大連）支配人（1925.12 現在）
松村　俊雄	東京	1918.		早大理工・建築	竹中工務店建築技師	
三木　武	兵庫	1923.		錦城商業	東京海上保険㈱勤務	
三隅　一成	福岡	1917.		東京帝大農・園芸	造園家	
宮下芳三郎	埼玉			慶大		
宮瀬　秀男	大分	1924.		早高在学		早稲田高等学院の略
村上　恵二	兵庫	1910.		東京帝大農・林学	朝鮮総督府営林廠、同林業試験場技師	京都帝大農学部教授（水害防止の研究）退官後信州大農学部長他　農博
村上節太郎	愛媛	1927.		東京文理大理・地理	文部省在外研究員として米、独に留学	愛媛大法文学部教授　「日本の柑橘栽培地域の発達と移動」で農博
森　順勝	愛知					死亡(1925.12現在)
森峰　耕作	岡山	1921.	1928.2	東京物理学校		幸助先妻、夏子親族
柳　恵	長崎	1921.		青山学院高商		戦後、武州製袋㈱社長他
矢野　正雄	愛媛？			東京高商	古河鉱業勤務	杵島炭礦大阪支店長他
山口　葎	愛知	1914.		南満医学堂(ママ)		大連医院内科医師(1925.12現在)
柚木園清次	鹿児島			陸軍士官学校		
柚木園利平	鹿児島					死亡(1925.12現在)
横田　正夫				慶大		
横山　康平	北海道			早大		死亡(1925.12現在)
横山　秀男	広島	1925.		小樽高商		北海道石油瓦斬㈱社長他
横山　有策	岡山	1900.		早大文・英文	早稲田中学校教諭	早大文学部教授　職員名簿参照
吉田　内次	北海道	1924.	1932.	巣鴨商業	井実商会勤務	㈱緑星社社長他　常太郎、トモ（職員名簿参照）次男　貞次改名？
吉田　洞介	京都	1923.	1926.4	東京帝大法	大蔵省属　主計局勤務	大阪財務局長　大阪証券会長他　清次郎、とも子（職員名簿参照）長男
鎧　源三	福島	1922.	1925.	東京帝大	三井銀行勤務	帝銀総務部株式課長他